

先天性甲状腺機能低下症の早期発見に関する研究

東邦大学医学部第一内科

入 江 実

昭和51年5月8日(土)学士会館に於いて第一回会合をひらき、本研究の趣旨の説明をすると同時に今後の研究方針について話し合いをもった。その内容はGuthrie法による乾燥汙紙血液を用いて、第一段階としてTSH(甲状腺刺激ホルモン)の測定法再検討と測定を出来るだけ多数行ない、マス・スクリーニングによる一次性甲状腺機能低下症の早期発見を試みることに、又一方、臨床所見からチェック・リストをつくって、臨床的に早期発見を行ない、検査成績によって確認することの2つの方向性で研究を行うことであった。

昭和52年2月26日(土)学士会館に於いて第二回会合をひらき、約一年間の成果について各自発表を行なった。その報告を総括すると次のようである。

1) 東邦大学医学部第一内科(入江 他)

我々はすでに乾燥汙紙血液を用いるTSHの測定法について発表した(Lancet II : 1233, 1975, 日内分泌誌 52:243, 1976)その方法についてさらに詳細な検討を加えた。とくに保存の問題については室温で7~9日位めであれば変化はないが、30~45日位放置するとかなり低下する。従って4℃保存が適当であると考えられた。この方法で、59000例の測定を行ない、新生児から1例のクレチン症を発見、5例のクレチン症でTSH異常高値を確認した。汙紙に2つのスポットがある場合の再検率は約0.2%であった。外国ではほぼ5000例に1例と考えられているので、さらにT₄(サイロキシン)の測定も含めてマススクリーニングを行う予定である。

2) 国立精神衛生研究所(成瀬)

前述の1)に協力し、臍帯血、新生児血のGuthrie法による採血を行なった。昭和51年11月より本研究所に於いても上述の方法によりTSHの測定を行ない約5000例の成績を分析し、3%位の資料の再検査を行なっている。1例臨床所見のはっきりしないクレチン症を発見した。

3) 大阪大学医学部中央検査部(宮井 他)

乾燥汙紙血液のTSH測定法につき基礎検討を行ない、十分な遠沈の必要なこと、2検体の抽出液を合わせて測定する“combined method”の検討を行ない、疑い例では再検査を

行なった。約25,000検体について検査を行ない、上位5%を仮りのcut off point とした。検査する人に知らせないで入れられたクレチン症の例は全て異常高値を示した。第二回会合時までは、クレチン症は発見されなかったが、その後2例をこの方法により発見した。

4) 大阪市立小児保健センター(大浦 他)

乾燥汚紙血液を用い、新生児の臍帯血から生後一週間の血中TSHの変動を観察し、臍帯血、生後0日、1日に高値を認め、以後減少することを確認した。尚阪大中検との共同研究を行なった(上記3)。

5) 金沢大学医学部小児科(中島 他)

臨床的にチェック・リストを作成し、ハイ・リスクの患者につきクレチン症を発見する試みを行なった。生後5日目のスコア、生後1ヶ月目のスコアとも3点以上示した例、14例につき検診を行ないTSHを測定したが、クレチン症は認められなかった。(対象は生後5日目409例、生後1ヶ月439例)、ハイ・リスク児の選出は落ちこぼれのないようにすることが大切で、疑しい例につきTSH、 T_4 の測定を行う予定である。

6) 名城病院小児科(川村)

臨床的な見地から1ヶ月までのチェック・リスト、3ヶ月までのチェック・リストを作成、実際の診療に応用した。それによって疑いのもたれた17例の血液をGuthrie 汚紙につけて東邦大学第一内科に郵送、2例がクレチン症であることがTSHの異常高値により確認された。3ヶ月の乳児検診2,400名では今の所発見されていない。

以上

↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

昭和 51 年 5 月 8 日(土)学士会館に於いて第一回会合をひらき,本研究の趣旨の説明をすると同時に今後の研究方針について話し合いをもった。その内容は Guthrie 法による乾燥濾紙血液を用いて,第一段階として TSH(甲状腺刺激ホルモン)の測定法再検討と測定を出来るだけ多数行ない,マス・スクリーニングによる一次性甲状腺機能低下症の早期発見を試みること,又一方,臨床所見からチェック・リストをつくって,臨床的に早期発見を行ない,検査成績によって確認することの 2 つの方向性で研究を行うことであった。